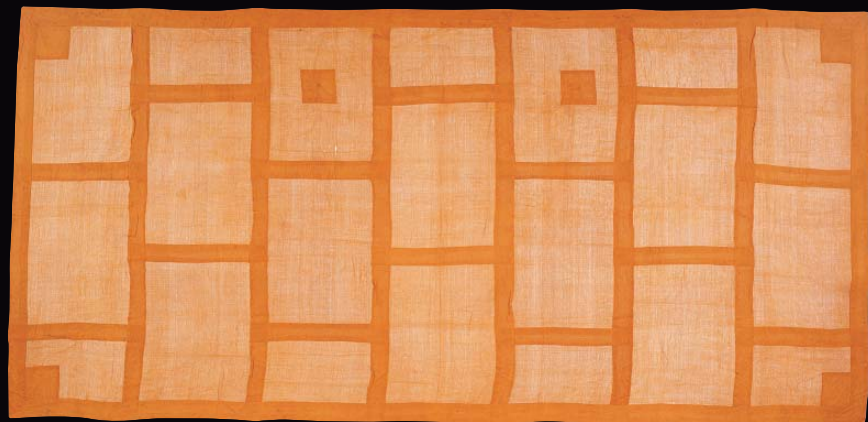


国家珍宝帳記載の品々

目を見張る木画の技と

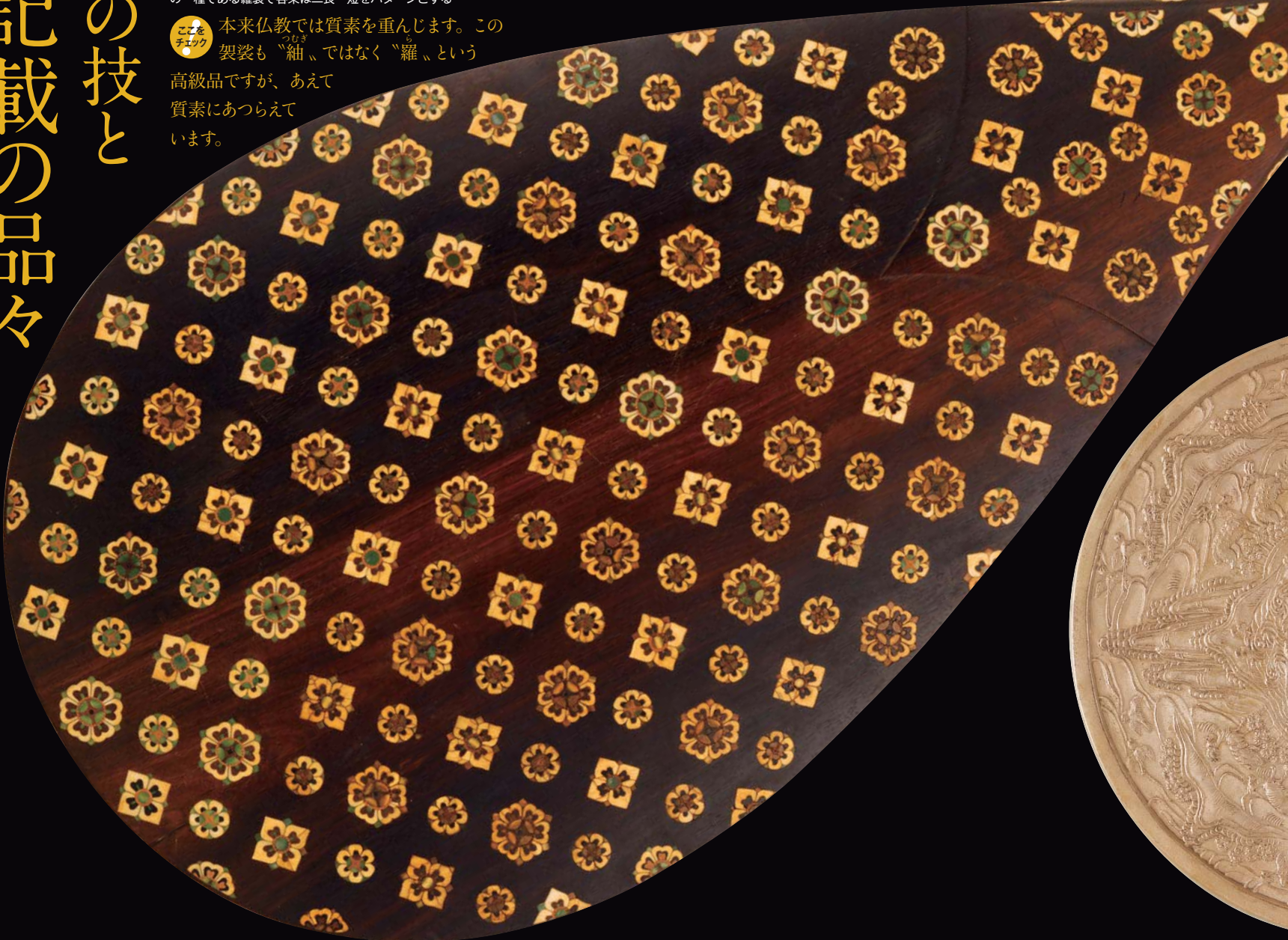


しちじょうかつしよくのつむぎのけさ
【七条褐色紬袈裟】

北倉、幅 297cm、縦 144cm
宝物の献納目録「国家珍宝帳」の筆頭に記された、聖武天皇ご所持の袈裟のうちの黄褐色の七条袈裟。もとは中国に金剛頂経系密教を伝えたインド出身の僧・金剛智のものとする。絹織物の一種である羅製で各条は二長一短をパターンとする

本来仏教では質素を重んじます。この袈裟も「紬」ではなく「羅」という高級品ですが、あえて質素にあつらえています。

高僧にゆかりある 聖武天皇の袈裟



いまでもとっても オシャレです

したんもくがそうのびわ
【紫檀木画槽琵琶】

南倉、全長 98.5cm、最大幅 40.7cm
四絃四柱、曲頭の琵琶の起源はペルシア。奈良時代に日本に伝わった。現在雅楽で用いる琵琶は本品とほぼ形状が同じ。紫檀製の槽（背面）には象牙、染角、ツゲなどを組み合わせた3種類の小花文が斜格子風に配されている

某ブランドの模様に似ているといわれることも。究極の美は時空を超えるのでは？ 現代に通用するオリエンタル文様です。



第67回 正倉院展

麗しき 天平の 宝物たち

千数百年の時の隔たりをものともせず、わたしたちの心を強く惹きつける正倉院宝物。細部まで工人の技が尽くされているからこそ、宝物はいまも力強く繊細で、そして美しい。奈良国立博物館工芸考古室長の清水健さんに聞く、第67回正倉院展出陳品の見どころと魅力。



神仙境 サファリへ Let's Go!

さんすいかちゅうはいのえんきょう
【山水花虫背円鏡】

北倉、径 27.4 cm、縁の厚さ 0.7 cm、重さ 3258.7g
白銅鑄製の円鏡。鏡背面中央の紐を通すつまみ（鈕）は山岳をかたどり、広大な自然のなかで動物が遊ぶ山水文様が施される。「国家珍宝帳」記載の鏡だが、図柄から別の鏡とする説も。蛍光X線分析から、唐製と考えられている

背面に刻まれた神仙境には虎、鹿、山羊、兎、水鳥、魚の姿。唐の人々の理想郷に動物たちを探してみては？



見えるところにも 見えないところにも 天平の美は光る

【琥碧魚形】

中倉、魚形の長さ7.7cm、厚さ1.6cm
魚形や刀子、小尺、水晶玉などの飾りを組紐に付け、腰帯から吊るす佩飾具は奈良時代、貴族たちが唐の風俗を取り入れたオシャレである。琥碧製の魚形（写真最下部）には口や眼、えら、ひれ、鱗など緻密な線彫りが施される

この魚形はきれいな透明の琥碧です。宝庫の佩飾具は皇族や高位の貴族たちが東大寺大仏に献納したものとわれています。

じゃらじゃら
じゃら
天平貴族の
お洒落グッズ



【密陀絵龍虎形漆櫃】

南倉、縦65.8cm、横106.0cm、総高46.3cm
長方形の唐櫃（収納容器）で材質はスギ。外面の表面に黒漆を塗り、白色顔料で文様を描き、さらに上から油を塗って保護する密陀絵の技法を用いる。霊獣やカモ・キジ、花、雲、蝶などを生き生きと描き、躍動感にあふれている

絵のある櫃は宝物ではまれ。生き生きと、おらかなタッチで描かれた霊獣や鳥類の姿は見応えがあります。

雲流れ
唐草文の花に
霊獣3頭の咆哮



第67回
正倉院展
麗しき
天平の
宝物たち

【蘇芳地金銀絵箱】

中倉、縦23.0cm、横31.6cm、高さ8.6cm
仏への献物用とみられる装飾箱。材質はヒノキ。表面は蘇芳色、内面は淡紅色に塗られ、表面には金銀泥で躍動感あふれる花や鳥の文様を表している。大破していたが明治時代に残存する底板や側板を使用して修理された

実に見栄えのいい箱です。蓋の縁をぐりと巡る花や鳥の絵は、1カ所にわざと蜂を配し、アクセントにしています（28ページ参照）。

花咲き鳥舞う
軽やかな
工人の筆



【筆】

中倉、管の長さ20.4cm、管径2.2cm
芯毛を中心に帯状の紙で毛を巻き込んで穂を作り、外毛をかぶせて円錐形に整えた筆。その形から雀頭筆と呼ばれる。管には斑竹が使用され、両端の金製覆輪や象牙細工など、精緻な装飾が施されている

筆は奈良の代表的な工芸品の1つ。この筆は非常に緻密な細工がなされた最高級品で、職人の遊び心も感じられます。帽（キャップ）は新補です。



天眼鏡
必携！
この技とくにご覧あれ

かせん
【花氈】

北倉、長さ 240cm、幅 129cm

色染めた羊毛を用い、蓮華唐草文を地氈に巻き込んだフェルトの敷物。白地に大輪の蓮華を配した縦横対称の構図である。裏面には「東大寺」印が押されている。獣の毛を縮絨する過程は、今日のフェルトの製法と同じである

以前はカシマに似たヤギの毛と考えられていましたが、科学的調査により羊毛が使われていることがわかりました。

お寺を飾った
大陸由来
の敷物



孫の手?・いいえ威儀正す仏具です

たいまいのたけがたによい
【玳瑁竹形如意】

南倉、長さ 60.5cm、掌の幅 9.3cm
法会の際に僧侶が手に持つ仏具の1つ。4つの節がある竹を模した長い柄の先に掌をつけ、先端を丸めてさらに返した形状で、孫の手のようにも見える。素材の玳瑁(タイマイ)とはウミガメの背甲。黄色の地に黒斑がある

表面に斑のある竹のように見えますが、ウミガメの甲羅です。枝まで作ってあるのが心憎いです。

寺院ゆかりの品々
宝物から知る
古代の
東大寺の姿

第67回
正倉院展
麗しき
天平の
宝物たち

とうなんいんごもんじょ
【東南院古文書第三櫃 第三十三巻】

中倉、長さ 69cm、縦 28.5cm

摂津国島上郡水無瀬(現在の大阪府三島郡島本町東大寺付近)にあった東大寺の荘園絵図。天平勝宝8歳(756年)12月16日の年紀などが記され、条里プランが完成する前の図とみられる。東大寺初期荘園のようすを知る伸びやかなタッチの絵図

古文書は華やかさには欠けますが、当時の生活がわかる手掛かり。本品は遺例の少ない奈良時代の絵画としても貴重です。

かきえのしゅび
【柿柄麈尾】

南倉、長さ 61.0cm、鐙幅 10.0cm
僧侶が威儀を正すため手に持つ仏具。2枚の狭木に獣毛を挟み整え黒柿の柄をつける。狭木の先端に象牙の龍頭を飾る。獣毛は毛先から約3分の1を紫に染め、それ以外の部分は本来の艶色をしている。

近年の調査で本品の獣毛は猪の毛だとわかりました。こうした新発見に出合うのも、正倉院展ならではの楽しみですね。

鯨のヒゲ?
いいえ猪の
毛でした



莊園を囲む山々
色鮮やかな奈良の絵図

